

# 民具と現代社会

## ——大学生に対する民具知識調査から——

櫻井 準也

### MINGU(Articles of Everyday Use) in Japanese Modern Society:

A MINGU Knowledge Survey for Japanese College Students

SAKURAI, Junya

#### Abstract

Before infrastructures, such as electricity, gas, and water service were fixed, and the time of mass production and mass consumption of an industrial commodity came, MINGU (articles of everyday use) was needed for the Japanese ordinary life. And now MINGU is exhibited at the museum as article which tells the Japanese past life. However, the present-day young people have knowledge of the MINGU which is inexperienced in use. I have borne interest in this tendency, and conducted MINGU knowledge investigation at two universities in the city of Tokyo. As a result, the present-day college students know a large number of MINGU names more than I have expected, and more than the number of MINGU which has actually use experience. And they knew MINGU name by school event, experience study, and anime, a teleplay, etc. Namely, MINGU are recognized through experience study in school, and visual media in present-day Japan.

#### 要 約

電気・ガス・水道などのインフラが整備され、工業製品の大量生産・大量消費の時代が到来する以前の日本において民具は生活必需品であったが、現在では生活に必要とされない民具は過去の生活を語る資料として博物館に展示されている。しかし、現代の若者は使用経験のないこれらの民具に対して一定の知識を持っている。筆者はこのことに興味を抱き、現代の若者と民具との関係を知るため都内の2つの大学で民具知識調査を実施した。その結果、現代の大学生は予想よりも多くの民具の名称を知っていること、その数は実際に使用経験がある民具の数より多かったことがわかった。さらには、学校行事や体験学習などに使用される民具やアニメやテレビドラマなどに登場する民具の正答率が明らかに高いことがわかった。すなわち、現代の若者の多くが学校での体験学習や映像メディアを通じて民具を認識できるようになることが現代日

本社会における民具認識の実態であることが判明した。

キーワード

民 具 (MINGU : Articles of Everyday Use)

民具知識 (Knowledge of MINGU)

使用経験 (Experience in MINGU using)

大学生 (University Students)

映像メディア (Visual Media)

## はじめに

21世紀を迎えた現在、我々の生活は大きく変貌した。それを象徴するのが物質文化であり、新しい製品が次々と発売されることにより現代人はモノに囲まれた生活を送っている。こうしたなか民具学という学問分野がある。民具学で研究対象となる「民具」という言葉はアチック・ミュージアムを主催した渋沢敬三が案出したもので、渋沢がそれまでの「土俗品」という表現を好まなかったためとされている（近藤2002）。一般に民具は、庶民が昔から使っていた日常的な生活用具で、自製を原則とし、流通しないものと考えられるが（民具と観光地で売られている民芸品を混同している人も多い）、生活用具だけでなく生産用具も量販店で購入する現代社会において、民具は以前とは大きく様変わりした。その一つが民具に使用される木や竹がプラスチックに変わる素材の変化であり、それに伴って生産技術が機械化され工業製品として大量生産が可能になった。この点について岩井宏実氏は「すなわち材料が何であるか。また手作りであるか否かは、資源材料、生産構造、流通機構、社会形態の差異からくることであって、民具にとって本質的なものではないと、割り切って理解する必要がある」（岩井1989：205頁）と述べている。

このように、時代に伴って民具は変化したが、民具は消滅し過去の遺物となったわけではない。生活用具である民具は使用される素材を変えながら、あるいは特定の場や時期（例えば正月）に限定されながらも生き残ってきた。そして、民具はその多くが日常的に使用される生活用具ではなく過去の生活や文化を象徴するモノとなった。しかし、このように現代社会において民具がどの程度認知されているか、また現代人はどのようにして民具の知識を得るかに関する調査はほとんど実施されていないというのが現状である。そこで本稿では、都内の大学生に対して筆者が実施した民具知識や使用経験に関する調査の結果について報告しながら、現代社会と民具と関係の一端を明らかにしてみたい。

## 1. 調査の概要

調査は筆者が担当した2005年度および2006年度の慶応義塾大学の日吉キャンパスでの教養科目の講義（『文化人類学』）および2006年度および2007年度の大妻女子大学の千代田キャンパスでの教養科目の講義（『地域文化論』）において実施した。慶応義塾大学の講義の履修者は、文学部（1年生）と経済学部（1・2年生）が主体で他に法学部（政治学科・法律学科）、医学部、総合政策学部の学生が一部含まれていた。有効回答者数は2年間で

224名である。これに対し、大妻女子大学の講義履修者は家政学部の被服学科、食物学科、児童学科、ライフデザイン学科、文学部の日本文学学科、英文学科、コミュニティー文化学科の学生ですべて2年生であった。有効回答者数は2年間で199名である。

調査は図示した50個の民具に対して別紙の「名称」、「使用方法」、「使用経験」、「何で知ったか」という設問に答えてもらうものである。解答時間は40分程度である。なお、設問に使用した民具は一般家庭に電化製品が普及する以前の日本（明治時代末期から戦後にかけて）のどの家庭にもあった生活用具を選出した。すなわち、これらの民具は電気やガスを使用しない日常生活用具ということになる。また、その他に「出身県」（幼児から小学校低学年頃に住んでいた都道府県）、さらに今回はデータとして使用しなかったが「父親の出身県」、「母親の出身県」の記入欄も設けた。今回設問に使用した50の民具は以下の通りである。

1. 羽釜（はがま）・かま・おかま 2. 鍋（なべ）・鉄鍋（てつなべ）・おなべ 3. 播鉢（すりばち） 4. 焙烙（ほうろく） 5. 箆（ざる） 6. 飯櫃（めしびつ）・おひつ 7. 臼（うす）と杵（きね） 8. 石臼（いしうす） 9. 蒸籠（せいろ） 10. 鰹節削り（かつおぶしけずり） 11. 重箱（じゅうばこ）・おじゅう 12. めんば・曲げわっぱ（まげわっぱ） 13. 行李（こうり） 14. 七輪・七厘（しちりん） 15. 膳（ぜん）・おぜん 16. 箱膳（はこぜん） 17. 卓袱台（ちゃぶだい） 18. 蠅帳（はいちょう） 19. 氷冷蔵庫（こおりれいぞうこ）・冷蔵庫（れいぞうこ） 20. 茶箆筥（ちゃだんす）・水屋（みずや） 21. 水甕（みずがめ） 22. 柄杓（ひしゃく） 23. 手桶（ておけ）・桶（おけ）

24. 岡持ち（おかもち） 25. 樽（たる） 26. 角樽（つのだる） 27. 火鉢（ひばち） 28. 囲炉裏（いろり） 29. 自在鉤（じざいかぎ） 30. 長火鉢（ながひばち） 31. 手あぶり（てあぶり） 32. 竈（かまど）・へっつい・くど 33. 火消し壺（ひけしつぼ） 34. 十能（じゅうのう） 35. 長持ち（ながもち） 36. 提灯（ちょうちん） 37. 行灯（あんどん） 38. 灯台（とうだい） 39. 燭台（しょくだい） 40. 箆（ほうき） 41. 叩き（はたき） 42. 塵取り（ちりとり） 43. 踏み台（ふみだい） 44. ゴミ箱（ごみばこ） 45. 熊手（くまで） 46. 箆筥（たんす） 47. 槽炬燵（やぐらこたつ）・炬燵（こたつ） 48. 炭取り（すみとり） 49. 湯たんぽ（ゆたんぽ） 50. 蚊帳（かや）

## 2. 調査結果

### 2.1 全体傾向

#### 民具名称（図1参照）

慶應義塾大学での民具名称の正答数は50問中最低3個、最高31個、平均17.5個であった。グラフをみると7～8個まで緩やかに増加していたものが9～10個から急に増加し、17～18個でピークとなり、その後25～26個で急激に減少し、その後は27～28個で若干増加したのち緩やかに減少している。これに対し、大妻女子大学での正答数は最低4個、最高29個で平均17.1個である。グラフをみると7～8個まで緩やかに増加しているが11～12個から急に増加し、15～22個でピークとなった後、25～26個で急激に減少し、その後は緩やかに減少している。正答数の平均値では慶應義塾大学の学生が若干高いが、他の調査年においても平均値は17個程度であり、都内の大学に通う大学生は今回設問した50民具のうち17民具、すなわち全体の3分の1程度の民具名称

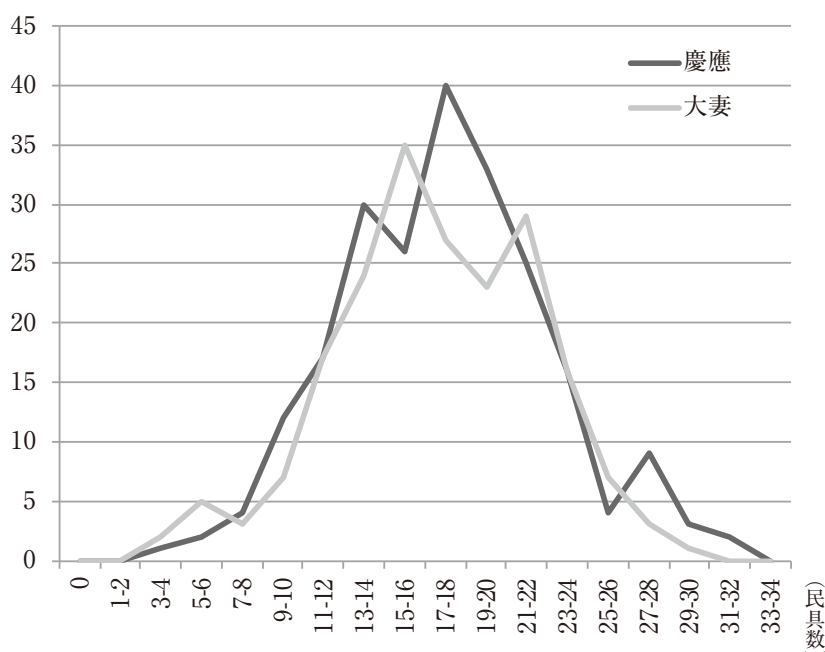


図1 民具名称の正答数 (1人あたり)

を知っていることになる。

次に、民具ごとの正答率について分析を試みたい。ここでは正答率で民具を3つのグループに分けて検討する。まず、正答率が50%以上の民具として、「箒」(40)の94.8%、「提灯」(36)の92.4%、「卓袱台」(17)の91.0%、「塵取り」(42)・「湯たんぽ」(49)の90.5%、「臼と杵」(7)の86.5%、「播鉢」(3)・「叩き」(41)・「蚊帳」(50)の85.6%、「囲炉裏」(28)の83.7%、「羽釜・かま・おかま」(1)の78.7%、「重箱・おじゅう」(11)の71.4%、「箆笥」(46)の71.2%、「柄杓」(22)の69.0%、「火鉢」(27)の52.2%があげられる(図2参照)。このうち、正答率80%以上と特に正答率が高いものとして「箒」(40)、「提灯」(36)、「卓袱台」(17)、「塵取り」(42)、「湯たんぽ」(49)、「臼と杵」(7)、「播鉢」(3)、「叩き」(41)、「蚊帳」(50)、「囲炉裏」(28)があるが、「何で知ったか」と「使用経験」の設問の答えを参照するとあ

る程度正答率が高い理由が説明可能である。まず、その理由の一つとして、小学校や中学校で清掃時に使用した「箒」(40)・「叩き」(41)・「塵取り」(42)、幼稚園などの餅つき大会で使用された「臼と杵」(7)のように幼稚園や学校で使用されたものの正答率が高いことがあげられる。次に、「提灯」(36)、「卓袱台」(17)、「蚊帳」(50)、「囲炉裏」(28)については映画やテレビドラマ、さらにはアニメに登場する民具であり、映像メディアの影響が想定できる。また、「播鉢」(3)は本来、家庭で使用される民具であるが、最近では料理屋や居酒屋で鍋料理などに小型の「播鉢」が使用されている。

次いで、正答率が50～5%のものとして、「手桶・桶」(23)の48.0%、「石臼」(8)・「竈・へっつい・くど」(32)の46.8%、「熊手」(45)の45.9%、「箆」(5)の39.7%、「鍋・鉄鍋・おなべ」(2)の38.5%、「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)の31.4%、「水甕」(21)

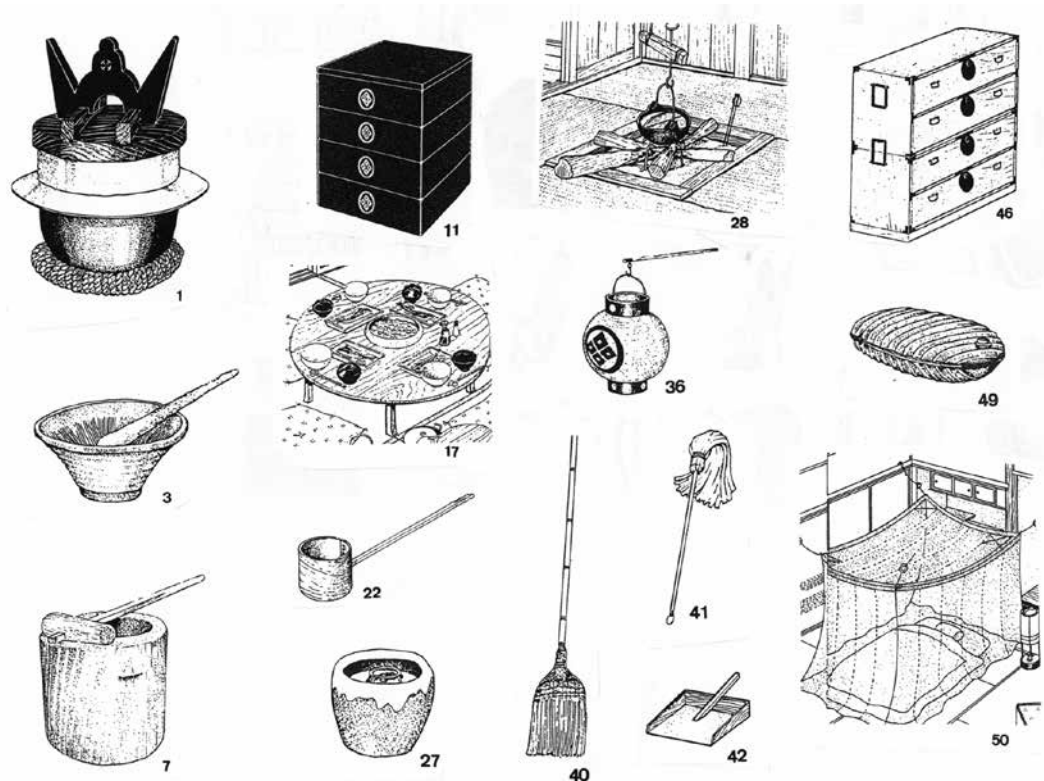


図2 正答率50%以上の民具

の29.8%、「飯櫃・おひつ」(6)の25.5%、「鯉節削り」(10)の22.0%、「踏み台」(43)の19.9%、「膳・おぜん」(15)の17.3%、「樽」(25)の17.0%、「蒸籠」(9)の13.5%、「ゴミ箱」(44)の10.4%、「燭台」(39)の9.7%、「七輪・七厘」(14)の8.7%、「行灯」(37)の7.1%がある(図3参照)。これらの民具には、「手桶・桶」(23)や「熊手」(45)のように使用経験はあるが名称がわからなかったもの、逆に「石臼」(8)、「竈・へっつい・くど」(32)、「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)、「水甕」(21)、「鯉節削り」(10)、「踏み台」(43)、「蒸籠」(9)、「七輪・七厘」(14)、「行灯」(37)のように使用経験はないが各種のメディアや博物館などで知ったものが多いようである。また、「膳・おぜん」(15)は普段は使用されないが、旅行先の旅館やお盆の際のお供えなどに使用される。

最後に、正答率が5%未満のもの(図4参照)として、「めんば・曲げわっぱ」(12)の4.3%、「茶箆筒・水屋」(20)の3.3%、「行李」(13)・「灯台」(38)の2.8%、「箱膳」(16)の2.4%、「長持ち」(35)の2.1%、「炬燵」(47)の1.7%、「岡持ち」(24)・「角樽」(26)の0.7%、「自在鉤」(29)の0.5%、「焙烙」(4)・「蠅帳」(18)・「長火鉢」(30)・「火消し壺」(33)・「十能」(34)の0.2%、「手あぶり」(31)・「炭取り」(48)の0%がある(図4)。これらの中には「焙烙」(4)、「箱膳」(16)、「蠅帳」(18)、「長持ち」(35)のように現代生活ではほとんど使用されず馴染みのないものや「めんば・曲げわっぱ」(12)、「岡持ち」(24)、「角樽」(26)、「自在鉤」(29)、「火消し壺」(33)、「十能」(34)、「炭取り」(48)のように難しい名称の民具で占められている。なお、「櫓炬燵・炬燵」(47)

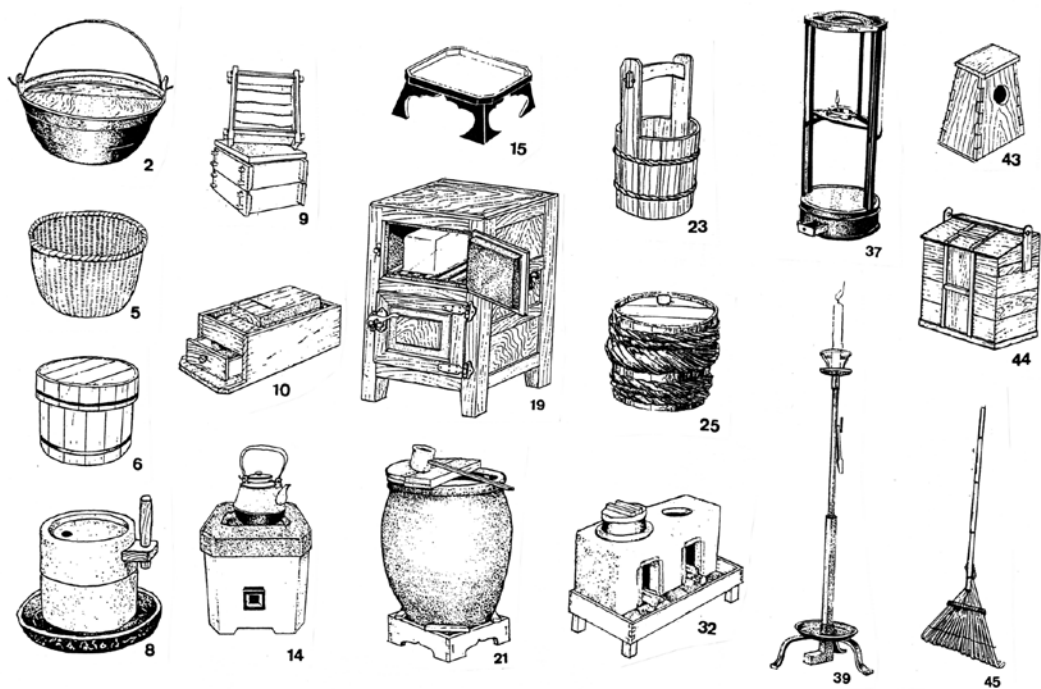


図3 正答率50～5%の民具

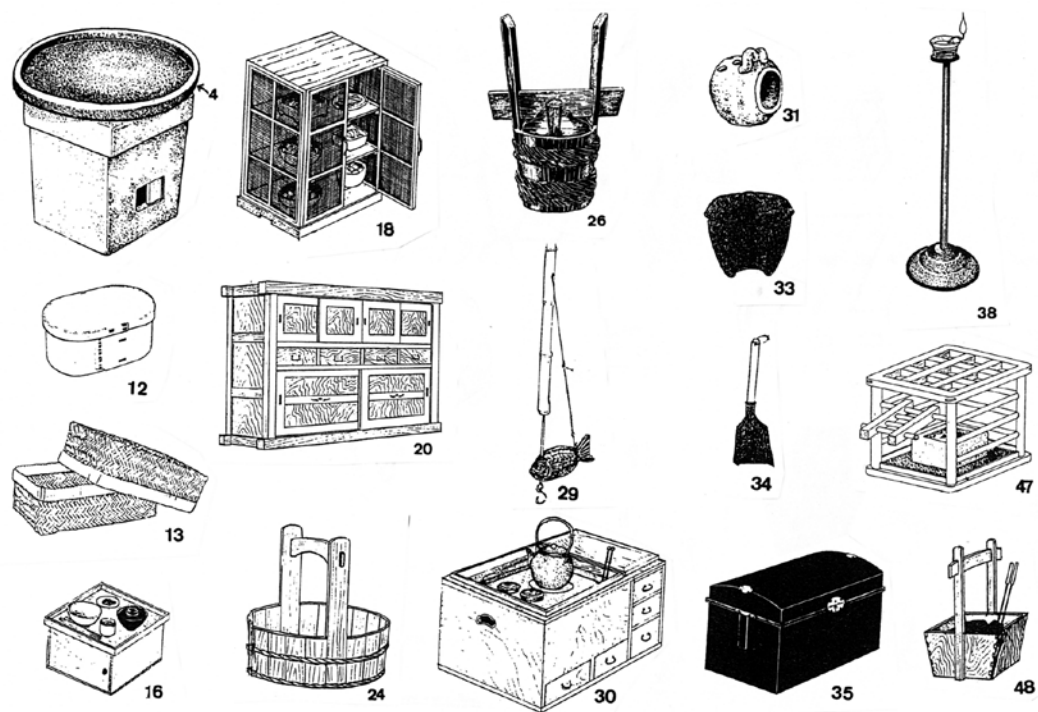


図4 正答率5%未満の民具

については、一定の学生に使用経験があると推測できるものの、布団をかけていない状態の図であったため認識できなかったと思われる。また、「岡持ち」(24)は寿司屋や和食料理店などでは現在でも使用されているが、「岡持ち」というと中華料理店などでバイクや自転車での出前に使用される方でジュラルミン製の「岡持ち」のイメージが強い。さらに、「手あぶり」(31)は「蚊取り線香入れ」、「炭取り」(48)は「炭入れ」と多くの学生が答えていた。

### 使用経験 (図5参照)

慶応義塾大学での使用経験のある民具数は50民具中、最低0個、最高23個、平均10.0個である。グラフをみると3～4個まで緩やかに増加していたものが急に増加し、9～10個でピークとなり、その後急激に減少し、13～14個からは緩やかに減少している。これに対し、大妻女子大学での使用経験のある民具数は最低2個、最高28個、平均は11.6個であっ

た。グラフをみると5～6個まで緩やかに増加していたものが急に増加して7～14個でピークとなり、その後急激に減少したのち15～16個から緩やかに減少している。このように、都内の大学に通う大学生の民具使用経験は今回の50民具のうち10～12個、すなわち全体の5分の1程度の民具の使用経験があることになるが、前述の民具名称では全体の3分の1程度の民具の名称を知っていたことと比較するとその割合は低いことがわかる。なお、大学ごとに平均値を比較すると、大妻女子大学が慶應義塾大学に比べ若干高いが、その理由として、知っている数が限られる民具の名称を記入するよりも名称を知らない民具も含めすべての民具の使用経験の有無を記入するほうが手間がかかるため、慶應の学生よりも大妻の学生のほうが時間をかけてより丁寧に回答してくれたためであると思われる。

次に、使用経験を民具ごとに検討してみたい。ここでは使用経験者比率で民具を3つの

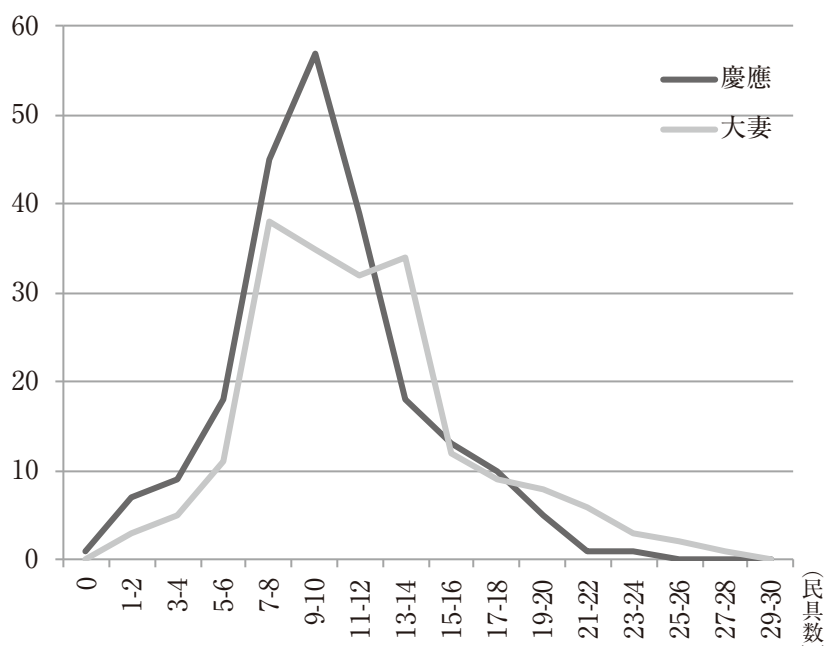


図5 使用経験のある民具数 (1人あたり)

グループに分けて検討する。まず、全体の50%以上の学生が使用経験あるとしたグループである。「箒」(40)が89.6%、「叩き」(41)が83.2%、「掃鉢」(3)が82.3%、「臼と杵」(7)が81.1%、「塵取り」(42)が76.1%、「柄杓」(22)が74.0%、「熊手」(45)が65.0%、「重箱・おじゅう」(11)が59.3%、「湯たんぽ」(49)が52.0%となっている。このうち、「箒」(40)・「叩き」(41)・「塵取り」(42)は既に述べたように小学校などで使用した清掃用具であり、「熊手」(45)も枯葉を集めるため屋外で使用された清掃用具である。これに対し、「臼と杵」(7)は幼稚園などの餅つき大会で使用されたもの、「柄杓」(22)は神社の手水鉢や墓参りで使用されるものである。また、「重箱・おじゅう」(11)については正月のおせち料理を入れる容器として現在でも頻繁に使用されている。「湯たんぽ」(49)については現在では使い捨てカイロが普及している割には使用経験率が高いようである。

次に、50～5%の学生が使用経験ありとしているグループである。「手桶・桶」(23)が46.1%、「箆笥」(46)が42.3%、「提灯」(36)が38.8%、「卓袱台」(17)が31.4%、「鰹節削り」(10)が22.5%、「膳・おぜん」(15)が22.0%、「笊」(5)が19.9%、「石臼」(8)が16.5%、「囲炉裏」(28)が16.3%、「飯櫃・おひつ」(6)が15.6%、「蚊帳」(50)が15.1%、「鍋・鉄鍋・おなべ」(2)が13.7%、「羽釜・かま・おかま」(1)が13.0%、「火鉢」(27)が12.8%、「踏み台」(43)が12.5%、「茶箆笥・水屋」(20)が11.8%、「蒸籠」(9)が9.7%、「水甕」(21)が9.0%である。このうち、柄の付いている「手桶・桶」(23)は墓参り、「箆笥」(46)は衣類の収納、提灯(36)は祭礼の際に使用されるが、この中では使用経験者比率が比較的高い。また、「卓袱台」(23)は意外に使用経験者比率が高いが、そ

の理由として脚がたためる本来の卓袱台ではなく小型のテーブルを卓袱台と勘違いしている可能性がある。

最後に、使用経験が5%未満のグループとして、「竈・へっつい・くど」(32)が4.7%、「自在鉤」(29)が4.5%、「七輪・七厘」(14)が3.8%、「ゴミ箱」(44)が2.4%、「めんば・曲げわっぱ」(12)が2.1%、「箱膳」(16)が1.9%、「行李」(13)・「樽」(25)・「十能」(34)が1.7%、「角樽」(26)が1.4%、「蠅帳」(18)・「炭取り」(48)が1.2%、「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)・「長火鉢」(30)が0.9%、「岡持ち」(24)・「長持ち」(35)・「行灯」(37)が0.7%、「燭台」(39)が0.5%、「火消し壺」(33)・「灯台」(38)・「炬燵」(47)が0.2%、「焙烙」(4)・「手あぶり」(31)が0%である。この中でも「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)、「長火鉢」(30)、「岡持ち」(24)、「長持ち」(35)、「行灯」(37)、「火消し壺」(33)、「灯台」(38)、「炬燵」(47)は使用経験者比率が1%未満と極端に低く、「焙烙」(4)および「手あぶり」(31)には使用経験者はいなかった。これらの民具は現代では使用されることがほとんどないものである。ただし、「炬燵」(47)については既に述べたように、図に布団がかかっていなかったために、「炬燵」と認識できなかったと考えられる。これに対し、「焙烙」(4)、「行李」(13)、「箱膳」(16)、「蠅帳」(18)、「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)、「角樽」(26)、「自在鉤」(29)、「長火鉢」(30)、「竈・へっつい・くど」(32)、「火消し壺」(33)、「長持ち」(35)、「行灯」(37)、「灯台」(38)、「燭台」(39)などはもはや実用品ではなく、博物館や郷土資料館に展示してある民具であり、使用経験がないのは当然である。また、使用経験者比率3.8%の「七輪・七厘」(14)については焼肉屋や海鮮居酒屋などで使用されることがある割には使用経験のある

学生は少ない。また、使用経験者比率1.2%の「炭取り」(48)も普段の生活では使用されないが茶道などで使用されている。

## 民具名称と使用経験

次に、民具名称と使用経験の関係について具体的に検討する。ここでは、①名称は知っているが使用経験のない民具、逆に、②名称は知らないが使用経験のある民具がどのようなものであるか詳細に検討してみたい。

### ①名称は知っているが使用経験のない民具

名称については正答しながら使用経験がないと回答した民具としては、「蚊帳」(50)が全体の70.7%と最も割合が高く、次いで「囲炉裏」(28)が68.1%、「羽釜・かま・おかま」(1)が66.7%、「卓袱台」(17)が61.7%、「提灯」(36)が53.4%、「火鉢」(27)が43.5%、「竈・へつつい・くど」(32)が42.8%、「湯たんぽ」(49)が39.5%、「石臼」(8)が35.5%、「箆」(46)が31.2%、「氷冷蔵庫・冷蔵庫」(19)が30.5%、「鍋・鉄鍋・おなべ」(2)が29.3%、「水甕」(21)が26.2%、「箆」(5)が20.3%と続いており、名称は知っているが使用経験がない民具の数は多く、その割合もかなり高いことがわかる。また、これらの民具をみると、「蚊帳」(50)、「囲炉裏」(28)、「羽釜・かま・おかま」(1)、「卓袱台」(17)、「提灯」(36)、「火鉢」(27)、「竈・へつつい・くど」(32)のように映画やテレビドラマ、さらにはアニメなどの映像メディアに頻繁に登場する民具が多いこともわかる。また、これらの民具は過去のわが国の生活を象徴する道具として博物館や郷土資料館などで展示されているものでもある。

### ②名称は知らないが使用経験のある民具

逆に、名称は非正答あるいは無回答でありながら使用経験があると回答した民具では、

「熊手」(45)が全体の26.0%と最も割合が高く、次いで「手桶・桶」(23)が18.7%、「柄杓」(22)が15.1%、「鯉節削り」(10)が13.5%、「膳・おぜん」(15)が12.8%、「茶箆・水屋」(20)が10.2%、さらに「搦鉢」(3)が7.3%、「臼と杵」(7)が7.1%、「叩き」(41)が6.9%、「水甕」(21)が5.7%、「石臼」(8)が5.2%、「飯櫃・おひつ」(6)が5.0%などとなっている。これらの数値をみると、名称は知られているが使用経験のない民具に比べて、その割合が全体に低いことがわかる。このうち最も割合が高い「熊手」(45)については、「箆」(40)や「塵取り」(42)のように小学校で清掃に使用されるがその名称は知らなかったと考えられる。「手桶・桶」(23)、「柄杓」(22)、「鯉節削り」(10)、「膳・おぜん」(15)、「茶箆・水屋」(20)、「搦鉢」(3)、「臼と杵」(7)などについても、難しい名称であったり、実際に使用した経験がありながら日常的に使用するものではないため、その名称が思い出せなかったと想像される。

## 2.2 所属学部による差異

次に、慶應義塾大学のデータを用いて所属学部によって正答数や使用経験に違いがあるか検討してみたい。慶應義塾大学の履修者は、文学部の1年生133名と他学部すなわち経済学部を中心に法学部（政治学科・法律学科）・医学部・総合政策学部の1・2年生91名で構成されており、ここでは両者の集計結果を比較してみたい。

### 民具名称

民具名称の正答数は文学部の学生が最低5個、最高31個、平均は18.5個である。これに対し、他学部（経済学部・法学部・医学部・総合政策学部）の学生の正答数は最低3個、

最高28個で平均は16.0個である。正答数をみる限り文学部の学生の正答率がやや高いことがわかるが、その背景として文学部の学生は過去の生活や文化などの文化的事象へ興味があり、他の学部学生よりも博物館や資料館へ行く機会が多く民具の展示を見る機会も多かったことが想定される。次に、文学部と他学部で正答率が異なった民具について検討すると、「めんば・曲げわっぱ」(12)の正答率が文学部9.8%、他学部1.1%、「茶箆筒・水屋」(20)の正答率が文学部4.5%、他学部1.1%、「ゴミ箱」(44)の正答率が文学部12.8%、他学部5.5%、「踏み台」(43)の正答率が文学部25.6%、他学部12.1%と正答率が倍以上異なり、次いで「鰹節削り」(10)の正答率が文学部26.3%、他学部15.4%、「水甕」(21)の正答率が文学部36.8%、他学部23.1%、「飯櫃・おひつ」(6)の正答率が文学部32.3%、他学部20.9%と正答率に1.5倍以上の差がみられた。すべて文学部の学生の正答率が上回っている。

### 使用経験

使用経験については文学部の学生が最低2個、最高23個、平均は10.9個である。これに対し、他学部の学生は最低0個、最高20個で平均は8.7個であり、やはり文学部の学生の使用経験比率が高くなっている。文学部と他学部の学生で使用経験比率が異なった民具について検討すると、「踏み台」(43)の使用経験比率が文学部25.6%、他学部12.1%、「自在鉤」(29)の使用経験比率が文学部3.0%、他学部1.1%、「茶箆筒・水屋」(20)の使用経験比率が文学部14.3%、他学部5.5%、「水甕」(21)の使用経験比率が文学部10.5%、他学部4.4%、「膳・おぜん」(15)の使用経験比率が文学部24.1%、他学部11.0%、「十能」(34)の使用経験比率が文学部2.3%、他学部

1.1%と使用経験比率が倍以上異なり、次いで「鍋・鉄鍋・おなべ」(2)の使用経験比率が文学部15.0%、他学部8.8%、「竈・へっつい・くど」(32)の使用経験比率が文学部3.8%、他学部2.2%、「石臼」(8)の使用経験比率が文学部16.5%、他学部9.9%、「囲炉裏」(28)の使用経験比率が文学部17.3%、他学部11.0%、「火鉢」(27)の使用経験比率が文学部13.5%、他学部8.8%と使用経験比率に1.5倍以上の差がみられる。やはり、すべて文学部の学生の割合が高いが、民具名称の正答率が低い民具に文学部と他学部の学生間で使用経験の差がみられるようである。

### 2.3 出身地による差異

さらに、学生の出身地域による差異について検討してみたい。ここでは慶応義塾大学および大妻女子大学の出身都道府県を「東京都とその周辺地域（千葉県・埼玉県・神奈川県）」と「その他の地域」に区分して集計してみた。なお、東京都とその周辺地域出身の学生は283名（慶應の学生が145名、大妻の学生が138名）、その他の地域は132名（慶應の学生が74名、大妻の学生が58名、ただし外国出身者は除く）であった。

### 民具名称

民具名称の正答数は東京周辺地域出身の学生が最低4個、最高31個、平均は17.5個である。これに対し、その他の地域出身の学生が最低5個、最高29個で平均は15.9個であり、正答数をみる限り東京周辺地域出身の学生の正答率がやや高いことがわかる。一般に地方出身者のほうが東京周辺地域出身者よりも民具名称の正答数が高いと考えがちであるが、実際にはその逆ということになる。次に、東京周辺地域出身とその他の地域出身の学生で正答率が異なった民具について検討すると、

ほとんどの民具の正答率に大きな差異は見られなかったが、「箱膳」(16)の正答率が東京周辺地域出身者3.2%、その他の地域出身者0.7%と東京周辺地域出身者の正答率が高く、逆に「長持ち」(35)の正答率が東京周辺地域出身1.1%、その他の地域出身4.2%とその他の地域出身者の正答率が高かった。このうち、「箱膳」(16)については通常の生活で、現代の若者がその名称を知ることはないため、博物館や資料館の展示を通じて知ったものであると推定できる。その他の地域出身者の正答率が高かった「長持ち」(35)については、箱形の衣類の収納具をその地方あるいは家庭で「長持ち」と呼んでいた可能性がある。また、その他にも「めんば・曲げわっぱ」(12)の正答率が東京周辺地域出身3.2%、その他の地域出身6.3%とその他の地域出身者の正答率が高く、「七輪・七厘」(14)の正答率が東京周辺地域出身者9.9%、その他の地域出身者6.3%と東京周辺地域出身者の正答率がやや高かった。このうち、「めんば・曲げわっぱ」(12)は主な産地である東北地方出身者(秋田県・山形県・福島県出身者)が正しく解答していた。これに対し、「七輪・七厘」(14)は元来、近代の都市生活者によって使用されたものであるが、現在では東京など都市部の焼肉店などで七輪を使用する店がみられることと関連している可能性がある。

## 使用経験

使用経験については東京周辺地域出身の学生が最低0個、最高25個、平均は10.5個、その他の地域出身の学生が最低3個、最高28個で平均は10.5個であり、両者に差はみられなかった。東京周辺地域出身の学生とその他の地域出身の学生で使用経験比率が異なった民具について検討すると、「十能」(34)の使用

経験比率が東京周辺地域出身者0.4%、その他の地域出身者3.5%、「炭取り」(48)の使用経験比率が東京周辺地域出身者0.7%、その他の地域出身者2.1%とその他の地域出身者の割合が高かった。これに対して、「ゴミ箱」(44)の使用経験比率は東京周辺地域出身者3.5%、その他の地域出身者0.7%と東京周辺地域出身者の割合が高かった。「十能」(34)と「炭取り」(48)についてはともに炭に関わる道具であり、東京周辺地域よりも地方で使用されることが多いと考えられる。同様に、その他の地域出身者の使用経験比率が高い民具として、「樽」(25)の東京周辺地域出身者1.1%、その他の地域出身者2.8%、「行李」(13)の東京周辺地域出身者1.1%、その他の地域出身者2.8%、「めんば・曲げわっぱ」(12)の東京周辺地域出身者1.4%、その他の地域出身者3.5%があるが、「樽」(25)は酒樽や醤油樽ではなく地方で漬物樽として使用されるイメージが強く、「めんば・曲げわっぱ」(12)は産地である東北地方で使用されることが多いことがわかる。これに対し、「ゴミ箱」(44)の使用経験比率が東京周辺地域出身者に高かった理由は不明であるが、その他に東京周辺地域出身者の使用経験比率が高い民具としては、「角樽」(26)が東京周辺地域出身者1.8%、その他の地域出身者0.7%、「七輪・七厘」(14)が東京周辺地域出身者4.6%、その他の地域出身者2.1%、「蠅帳」(18)が東京周辺地域出身者1.4%、その他の地域出身者0.7%であった。

## 2.4 小 結

以上、現代の大学生の民具知識や民具使用経験に関する調査結果について検討した。全体傾向をまとめると、正しく答えられた民具名称は慶応義塾大学で一人あたり17.5個、大妻女子大学で一人あたり17.1個であり、設問数

が50問であるので、現代の大学生は全体の3分の1程度の民具の名称を知っていることがわかった。これを、民具ごとに検討すると正答率が高い民具は小学校などで使用された道具やイベントで使用された道具、あるいは映画、時代劇、アニメなどに登場したものが多いことがわかった。これに対して、正答率が極端に低い民具については特殊な民具やその存在は知っているものの名称が難しい民具や今回の図では判別が難しい民具で占められていた。次に、使用経験は慶応義塾大学で一人あたり10.0個、大妻女子大学で一人あたり11.6個であり、現代の大学生は全体の5分の1程度の民具の使用経験があることがわかった。これを民具ごとに検討すると、やはり小学校などで使用した清掃用具、餅つき大会など幼稚園のイベントで使用された道具、さらには神社や墓参りの際に使用される道具や正月に使用される道具などの使用経験の割合が高かった。これに対して、使用経験の割合が低かったものは現代社会では使用されることがほとんどなく現在では博物館や郷土資料館に展示してある民具が主体であった。なお、この点について、①名称は知っているが使用経験のないもの、②名称は知らないが使用経験のあるものについて検討した結果でも同様の傾向がみられた。

さらに、所属学部（慶應義塾大学）や東京周辺地域出身者と地方出身者による違い（慶應義塾大学・大妻女子大学）についても検討した。その結果、所属学部については民具名称の正答数は文学部が一人あたり18.5個、他学部（経済学部・法学部・医学部・総合政策学部）が一人あたり16.0個、使用経験については文学部が一人あたり10.9個、他学部（経済学部・法学部・医学部・総合政策学部）が一人あたり8.7個で両者とも文学部の学生の正答率が高いことがわかった。次に東京周辺

地域出身者とその他の地域出身者による違いでは、民具名称の正答数は東京周辺地域出身の学生が一人あたり17.5個、その他の地域出身の学生が一人あたり15.8個であり、正答数をみる限り東京周辺地域出身の学生の正答率がやや高いことがわかった。また、使用経験については東京周辺地域出身の学生が一人あたり10.5個、その他の地域出身の学生が一人あたり10.5個で両者に差はみられなかった。

### 3. 近代民具をめぐる諸問題

#### 3.1 インフラ整備と民具

今回の調査では電化以前の日本で使用された民具を調査対象としたが、民具を「民衆の日常生活用具の総称」（『広辞苑 第6版』）と定義するならば、羽釜が電気釜となり、氷冷蔵庫が電気冷蔵庫になったように主に電化に伴って素材や構造が変化し、新たに登場した民具（電化製品）の存在を無視することはできない。そのため民具について検討するためには日本の近現代において電気・ガス・水道といった社会インフラの整備がどのように進行してきたか知っておく必要がある。

例えば、光源の変化では、明治初年までは江戸時代と同様に灯油（菜種・綿実の搾り油）や和燭燭が使用され、明治10年代になると一般にランプが普及する。これに対し、大都市や開港場では明治5年（1872）の横浜をはじめガス灯が街灯として使用された。電灯は明治20年（1887）に東京に電力供給開始され翌21年（1888）に東京に街灯（アーク灯）が設置されるが電灯が急速に普及するのは明治末期から大正初期にかけてのことである（大正2年（1913）には全国戸数の約1/3に電灯が設置されたが、地域格差が大きかった）。なお、電気は古くから熱源としても使用されていた。大正10年代は第1次家庭電化の時代

と言われ、電熱盤、炊飯電熱器（七輪）、電気コンロ、電気釜などの電化製品が発売され、昭和初期になると換気扇、トースター、卵茹器、コーヒー沸し、ワッフル焼器、電気冷蔵庫、レンジ、皿洗器、瞬間湯沸器などが登場した。

次に、水源の変化では、従来は湧水・流水や井戸から水が汲まれ屋内の水甕に保存されたが、上水道は明治20年（1887）に国内初の神奈川県新水道（横浜）が敷設されたものの上水道の設置は遅れ、大正5年（1916）の給水戸数は全体の3.6%に過ぎなかった（これに対して共同栓利用は56.8%であった）。さらに、燃料の変化についても江戸時代のように薪や炭が中心であった時期が長く、熱用ガスの利用が始まったのは明治32年（1899）である。明治末期～大正初期に地方都市でのガス事業が始まり、昭和5年（1930）以降、燃料としてのガスが一気に普及した。また、熱用ガスの地方での利用は戦後のプロパンガス（液化ガス）の普及が大きい。このようにインフラ整備状況によって使用する生活用具（民具）が決定しており、近現代の民具を考える上でその地域におけるインフラ整備の状況が無視できない重要な要素であることがわかる。

### 3.2 民具の素材変化

次に、近現代の民具について検討するうえで重要な問題として素材の変化がある。江戸時代以来の民具は多くが木・竹・紙・漆・鉄・銅、あるいはガラスや土（土器・陶磁器）を使用していたが、近代になるとブリキ、アルミ、ホーロー、アルマイト、合成樹脂（ベークライトなど）が使用されるようになり、さらに戦後になるとステンレススチール（クロムを12%以上混ぜた合金）や石油化学系プラスチックが使用されるようになった。

このうち、ブリキ（錫被覆鉄）やアルミは明治30年代に輸入され、明治末期には生産量が激増し、海外へ輸出されるようになった。ホーロー（ホーロー鉄器）は鉄器に釉薬を塗って焼いたもので明治末期に輸入され大正期には輸出されるようになっている。大正12年（1923）に日本で発明されたアルマイトはアルミ製品の表面を酸化アルミニウムで被覆したもので昭和になってアルマイト製弁当が大流行した。また、明治・大正時代のプラスチック（合成樹脂）はセルロイドやベークライトなどで、1873年にアメリカで商品登録されたセルロイド（セルロース・ニトレイト：硝酸繊維素）はサーモプラスチック（熱可塑性プラスチック）の一種で当初は象牙、真珠、亀甲のイミテーションとして使用されてきた。1907年にアメリカで発明されたベークライトはフェノール（石炭酸）とホルムアルデヒドを合成したサーモセッティングプラスチック（熱硬化性プラスチック）でわが国では大正4年（1915）に製造が開始され汁碗や重箱に使用された。これに対し、戦後の昭和30年（1955）以降になると石油化学系プラスチック製品（塩化ビニール、ポリプロピレン、ポリエチレンなど）が製作されるようになり、バケツなど様々な製品が作られ、現在に至っている。このように、近代になるとアルミや各種のプラスチックなど新たな素材が登場することによって民具の基本的な機能は変えずに軽量化や耐久化が可能になり、工業製品として大量生産が可能になった。そのため現代でも使用されているプラスチック製の民具の形状から旧来の民具の名称や使用方法を推定することが可能である。

### 3.3 民具知識と映像メディア

これに対して、今回の調査で明らかになったこととして、現代の若者の民具に対する知

識に映像メディア作品が大きな影響を与えていることがあげられる。例えば、民具を「どこで知ったか」という設問に対して、大妻女子大学の学生（ただし、複数解答可）ではテレビあるいはアニメなどの映像メディアを通じて知ったという回答が多数あった。それらを集計してみると、「アニメや時代劇などのテレビ番組や映画」が一人当たり平均7.3個、「本・絵本・マンガ・教科書」が一人当たり平均1.3個、「幼稚園や小学校」が一人当たり平均1.5個、「博物館や資料館」が一人当たり平均0.6個という結果であった。これらの数字を見る限り、テレビや映画で放映されるアニメや時代劇などの影響が特に大きく、本や絵本の影響はそれほど大きくないことがわかる。これに対して、博物館や郷土資料館の展示で知ったという学生は一部に限られている。

このようなメディアの影響が大きいと推定されるのが「名称は知っているが使用経験のない民具」であり、高い割合を占める民具は「蚊帳」(50) が全体の70.7%と最も割合が高く、次いで「囲炉裏」(28) が68.1%、「羽釜・かま・おかま」(1) が66.7%、「卓袱台」(17) が61.7%、「提灯」(36) が53.4%、「火鉢」(27) が43.5%、「竈・へっつい・くど」(32) が42.8%であった。これらの民具はテレビや絵本などの各種のメディアによって知ることになった民具ということになる。こうしたなかで特に影響が大きいものがアニメ作品であり、「どこで知ったか」という設問に対して大妻女子大学の学生の中には『まんが日本昔話』あるいは『日本昔話』と答えた学生が一定数存在した。具体的には、「行李」(13) の5名を筆頭に、「羽釜・かま・おかま」(1) ・「火鉢」(27) ・「囲炉裏」(28) が3名、「臼と杵」(7) ・「石臼」(8) ・「飯櫃・おひつ」(6) が2名、「鍋・鉄鍋・おなべ」(2) ・「自在鉤」(29) ・「灯台」(38) が1名であっ

た。また、今回の調査で明らかになったこととして、「卓袱台」(17) と「蚊帳」(50) が特定のアニメ作品によって知られるようになった民具であることがあげられる。このうち「卓袱台」(17) については「どこで知ったか」という設問に対して、大妻女子大学の学生は具体的なアニメ名として6名がテレビアニメの『サザエさん』、3名がテレビアニメの『巨人の星』をあげていた。さらに「蚊帳」(50) については50名がアニメ映画の『となりのトトロ』、3名がアニメ映画の『火垂るの墓』と回答しており、現代の若者に対するジブリ作品の影響力の大きさが窺えた。

## おわりに

かつて最低限の必要な道具とともに暮らしていた日本の民衆は、戦後の高度成長期以降になって大量生産・大量消費の時代をむかえると溢れる道具（モノ）に埋没しながら生活を送るようになった。このことは、かつて世界各国の家族の生活用具を自宅の前にすべて並べて撮影された写真集『地球家族』（マテリアルワールド・プロジェクト1994）の中で日本の家族の生活用具の数が他の国の家族を圧倒していたことに象徴される。

今回は現代社会では様々な理由で必要とされなくなった民具やインフラの整備によって現在では使われなくなった民具を中心にピックアップして現代の大学生に対して民具知識の調査を実施した。この調査で提示した民具はもはや「日常生活用具」ではなく、その多くは「非日常生活用具」となっているが、これらの「非日常生活用具」の3分の1程度の名称を現代の大学生が知っていたことはある意味驚きであった。そして、調査結果を詳細に分析してみると、現代の大学生が今や「博物館行き」となった日常生活用具に関する知

識を保持している背景としてアニメや時代劇などの映像メディアの影響が大きいことも明らかとなった。しかし、道具は本来保存されるのではなく使用されることによって存在価値が認められるものであり、使用に伴う身体感覚も含めて道具は人の記憶に残されるべきである。筆者のように考古学や物質文化学を専攻するものにとって道具の知識のみが先行する現状に対して危惧を抱かざるをえない。学校教育や博物館における体験学習が盛んなこともこの現状を踏まえてのことと思われるが、今回の調査結果は一般の人々に道具（モノ）の本質を理解してもらうためにどのような努力が必要であるかを改めて考えさせるものであった。

#### 引用・参考文献

- 岩井宏實（編）「在来民具の再生と継承」『民具が語る日本文化』河出書房新社、1989年、181～205頁
- 岩井宏實（編）『民具の世相史』平凡社、1994年
- 岩井宏實『ちょっと昔の道具たち』河出書房新社、2001年
- 柏木 博・小林忠雄・鈴木一義（編）『日本人の暮らし—20世紀生活博物館』講談社、2000年
- 栗田靖之「物質文化から見た現代家庭」『国立民族学博物館研究報告』2巻4号、1977年、634～701頁
- 小泉和子「暮らしの道具」『岩波講座 日本通史 第13巻近世3』岩波書店、1994年、339～361頁
- 小泉和子『室内と家具の歴史』中央公論社、1995年
- 小泉和子『台所なつかし図鑑』平凡社、1998年
- 近藤雅樹「民具の定義とイメージ」『講座日本の民俗学9 民具と民俗』雄山閣、2002年、15～31頁
- 桜井準也「高度経済成長期の考古学」慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室『民族考古』第4号、1997年、71～94頁
- 桜井準也2002「近世・近代考古学と生活財研究」『民族考古』編集委員会『民族考古』第6号、2002年、57～82頁
- 桜井準也『モノが語る日本の近現代生活』慶應義塾大学出版会、2004年
- GK研究所『図説 台所道具の歴史』柴田書店、1980年
- 中鉢正美（編）『生活学の方法』ドメス出版、1986年
- 日本生活学会（編）『台所の100年』ドメス出版、1999年
- 日本民具学会（編）『日本民具辞典』ぎょうせい、1997年
- 古島敏雄『台所用具の近代史』有斐閣、1996年
- マテリアルワールド・プロジェクト（代表ピーター・メンツェル、近藤真理・杉山良男訳）『地球家族—世界30か国のふつうの暮らし』TOTO出版、1994年
- 宮本常一『民具学の提唱』未来社、1979年

